

第56回中学生作文コンクール

優秀賞

目に見えていなくても

富山県 高岡市立高岡西部中学校 三学年

高森 駿介

「行ってきます。」

そうやって僕は、毎週発売を楽しみにしている雑誌を買いに行った。中学校の入学を機に祖父に買ってもらった自転車。僕はこの自転車で遊びに出掛けるのがとても大好きだ。その日もいつものように雑誌を買った帰り道、目の前の障害物を避けようと、バランスを崩してしまい自転車から転げ落ちてしまった。幸いにも車通りの少ない道だったので、大事には至らなかったが、その時起こった一瞬の出来事に頭が真っ白になったのを今も鮮明に覚えている。ふと足元を見ると、道路の土砂を巻き込んだ大きな傷ができていた。家までは残りわずかだったこともあり、自転車を引いて家へ向かい、すぐに母に伝えた。

「あら、どうしたの。」

母は、愕然としていた。すぐに、応急処置をしようと試みたものの土砂を巻き込んでいたためか中々異物を洗い流すことができない。しかもその日は、あいにくの土曜日。かかりつけの病院は休診日だった。どうしよう。とても焦った。母は必死に診察している病院を探し出し、片道四十分をかけて、遠くの病院まで向かった。するとすぐに、

「手術が必要です。」

と医師から言われた。僕は、

「手術？」

そんなに大きなケガではないかと思っていたので、とても驚いてしまった。緊張の中、手術は着々と進められた。麻酔をしていたので、痛みは全くなかったが、その時は不思議な感覚だった。素早く、そして的確に手術をこなす医師の姿をみてとても感動したのを覚えている。通院は、三回必要となった。一生懸命仕事をして帰って来た母と、片道四十分をかけ病院へ。母にはとても迷惑をかけてしまったので、感謝しなければいけないと思う。また、感謝しなければならぬのは、母ばかりではない。祖父も足をケガしてから数カ月は学校の送り迎えをしてくれた。祖父もまもなく七十七歳。本当に申し訳なく思った。僕は、足をケガしたことにより、家族、医師、優しく声掛けをしてくれた看護師の方々、ケガを心配してくれた友達や先生から助けられながら生活していることを実感したし、嬉しかった。みんなに僕は、

第56回中学生作文コンクール

「ありがとう。」
と言った。

しかし、今挙げた人たちだけから助けられたのだろうか。先日、母から母がかけてくれていた生命保険から少し医療費の給付金が出たことを聞いた。困っている人のために、保険をかけている人みんなで助け合う。僕は、この仕組みにとっても関心を持った。その時、僕はありがとうと言わないといけない人たちはもともといるなど感じた。助けてもらっているのは、自分の身の回りにいる人、つまり「目に見えている人」ばかりだけでない。目に見えていなくても、僕は保険をかけている様々な人たちから間接的に助けられていることに気づかされた。

今回、ケガをしたことは残念なことだった。だが、生命保険のことなど考えたこともなかった僕が、自分のケガをきっかけに、生命保険について考え、学習することができたことは、よかった。万が一の時にでも生活していけるのは、「困っている人のために、お互いに助け合う」この人々の優しさがつくり出す相互扶助の精神が、私たち一人ひとりの生活を支えているのだと肌で実感した夏だった。